宗教新聞
発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net

© 宗教新聞社 2021

購読料（税込）

1部	500円
半年	3,000円（〒共）
年間	6,000円（〒共）

〈社是〉

一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

現代京都藝苑の展覧会とシンポジウム

死と向き合う中にある生の充実

「悲とアニマII～いのちの帰趨」

京都市

現代京都藝苑実行委員会が主催する現代美術の展覧会とシンポジウム「悲とアニマII～いのちの帰趨」が11月、京都市内で開かれた。コロナ禍で近代文明の脆弱さが浮き彫りになり、人々が不安に包まれる今、生の充実は死と向き合う中にあり、そこから日本の伝統的な感受性が現代に現われるとの観点から、東日本大震災から10年目の本年実施された。作品は11月19日から28日まで、市内の建仁寺塔頭・両足院とギャラリー The Terminal KYOTO で公開され、シンポジウムなどのイベントも開かれた。宗教学者の鎌田東二京都大学名誉教授らが監修し、美術評論家の秋丸知貴上智大学グリーフケア研究所特別研究員らが企画した。

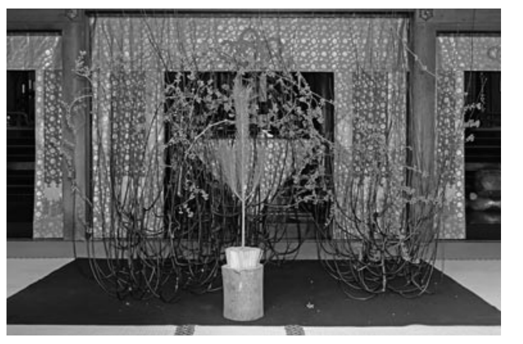
献華式で花をいける池坊専好師＝11月18日、東山区の建仁寺塔頭・両足院

展覧会の第一会場、建仁寺塔頭・両足院は「彼岸」を、第二会場は「此岸」を象徴したという（鎌田氏）。展覧会に先立ち11月18日、華道家・池坊専好師（次期家元）が、両足院本堂で献華式を行った。仏間には、花をアレンジするための黒い木の枝が空中に伸び、床には、くり抜かれた丸太にわら束が詰められた花台が置かれた。

専好師は、花台から離れたところに立ち、南天の実の付いた枝を立ったまま受け取り、枝に近づき、乗せるようにしていけて行く。受け取り歩み、いけるという繰り返しによって、南天の緋色の実が、鮮やかに空間に広がって行く。

最後の一刺しは常緑の松の小枝で、専好氏は、本展の監修者であり神道家でもある鎌田氏に「委ねることによって、日本の優しさ、感受性を表現したかった」という。鎌田氏は、その松の小枝を受け取り、束ねられた丸太の中のワラ束に刺して、完了した。

丸太に詰められたわら束に刺された松の小枝は、広がった緋色の南天の実を背景に、生への意思を天に伸ばそうとするかのようだ。緋色の激しい壮年の時を終え、老いを象徴するわら束の中から、再び新しい緑の生命が生みだされるような。


池坊専好師の作品「巡り――いのちが去り」

本展覧の作品は、彫刻、絵画、写真等で、大船真言氏の「WAVE #128」、近藤高弘氏の「真なる金」、鎌田東二氏の「合一」、勝又公仁彦氏の「再び森が薫る」、岡田修司氏の「水辺76」、池坊専好師の「巡り――いのちが去り」、松井紫朗氏の「大黒」、入江早耶氏の「青面金剛困籠奈ダスト」、大西宏志氏の「TSUNAMI 2021」、小清水漸氏の「雪のひま」、関根伸夫氏の「位相」、村井修氏の「関根伸夫《位相・大地》1968」、成田克彦氏の「SUMI」、吉田克朗氏の「触」などである。

シンポジウムの一つが「宗教信仰復興と現代社会」をテーマに21日、両足院で行われた。参加者は鎌田氏のほか、島薗進東京大学名誉教授、水谷周・一般社団法人日本宗教信仰復興会議代表理事（日本ムスリム協会理事）、加藤眞三慶應義塾大学名誉教授（内科医）、弓山達也東京工業大学教授、およびコメンテーターとして伊藤東凌・建仁寺両足院副住職、企画者の秋丸知貴上智大学グリーフケア研究所特別研究員（美術評論家）、作品出品者の大船真言氏も加わった。

島薗氏が司会を務め、①宗教信仰復興とは何か、②今、宗教信仰復興がどういう風に起こっているか、③どんな宗教信仰復興が望まれるか、④私たち一人一人にとって宗教信仰復興とは何か――という観点からディスカッションが行われた。

シンポジウム参加者から展覧会の作品について、「『彼岸』と『此岸』の両方に脚を跨いで立つ姿は信仰そのもの。信仰とはこの世の事がらをあの世の脈絡で読むこと」（水谷氏）、「アーティストが作品を作る場合、仏様や神様のような大いなるものから『作らされている感』もある」（弓山氏）などのコメントがあった。（4面に続く）

灯

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」（フィリピ4：4―7）

日本では師走の慌ただしい季節だが、キリスト教文化圏では、クリスマスを迎える心躍る時だ。街には〝Joy to the world〟（もろびとこぞりて）と、クリスマス・キャロルが響き渡る。彼らは世界を愛で統べ治められる主の到来を待ち望み、喜びと希望に胸躍らせながらこう歌ってきた。

「世界よ喜べ、主がやってきた！／王を迎え入れようじゃないか／みな心に神を抱こう／天も地も歌え／さあ天も地も歌え／天も地もみな歌え／世界よ喜べ、救世主が君臨される…罪は少なくなり、悲しみが育つことはない／苦痛の種もはびこらない」

疾病と災害、紛争と争いのために、人と人、国と国の行き来が制限された世界を経験した人々に、喜びの訪れが届くことを願う。（I）

神戸で第5回世界平和 祈りの幕開け

「もう一つのエルサレムは日本」

世界平和に重要な使命持つ

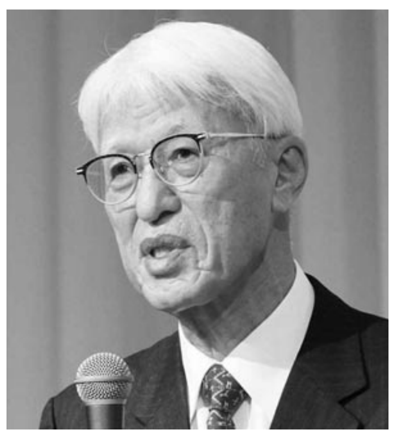
SUNRISE PRAYER FOR WORLD PEACE
Pray 祈
2021.11.11
世界平和
祈りの幕開け
東大寺大仏開眼供養でも披露された魚山流天台聲明研究會による「聲明」＝11月11日、神戸ポートピアホテル

神戸平和研究所（杣浩二理事長）主催の「世界平和　祈りの幕開け」が神戸市の神戸ポートピアホテルで開催された。「宗教の違いを超えて世界平和を実現しよう」という趣旨のもと宗教関係者ら約170人が参加。毎年11月11日に開催されており今年は5回目となる。

会の冒頭、仏教、神道、キリスト教、イスラム教、天理教、大本教、宇宙根本神など各宗教の代表がそれぞれの形で祈った後、参加者全員が世界平和のための黙祷を捧げた。

続いて三宗司郎・神戸平和研究所所長が「神戸から世界平和を願ってわずか5人で立ち上げた会が、現在は国際的な規模になったことを感謝する」と挨拶した後、魚山流天台聲明研究會によって、752年の東大寺大仏開眼供養でも披露された「散華」などの聲明が実演された。インド、ベトナム、中国、朝鮮半島などアジア諸国からも僧侶らが来日し、1万人以上が集まったと伝えられる開眼供養を盛り上げた荘厳な聲明に参加者は耳を傾けた。

杣理事長は「世界に2つのシオンとエルサレムがある」と題し以下のように講演。杣氏はモルドバ国立教育大学から名誉教授・哲学博士の称号を授与されている。


講演する杣浩二・神戸平和研究所理事長

日本の文化や言語に古代イスラエルとの共通点が多く見られることや、イスラエルの「失われた十部族」が日本に渡来した可能性は、イスラエルの複数の学者も指摘している。これまで実際に日本各地の寺社、ギリシャやエジプトなどにも赴き調査した結果、そのことを確信するとともに、世界の宗教や文化のルーツは一つであることがわかり、その成果を『世界の文化は聖書から』という著書にまとめた。さらにヘブル語やギリシャ語にも精通する聖書研究家・藤森三千雄氏が、これまで旧約聖書のイザヤ書で単に「光」と訳されている箇所は「日の昇る東の地」と訳すべきと立証した研究を踏まえ、聖書に予言されたシオン、エルサレムが日本であることを再確認できた。日本は世界平和に対して重要な使命を持っている国だという思いを強くした。

今年は新型コロナ感染拡大防止のため参加人数を制限されたが、ルワンダのルワムキョ・アーネスト大使らアフリカ4か国の駐日全権大使が参加するなど、世界平和を願うにふさわしい国際色豊かな集いとなった。

天地

ほぼ毎朝、日の出前から犬と散歩していると、夏から冬に向けて太陽が南に移動するのがよくわかる。仲間と耕作している田んぼを眺めながら歩き、草刈りや草や木、水路のごみ・泥揚げなど必要な作業に思いを巡らせる。1週間前にまいた小麦が芽吹き始め、雨のため遅れている小麦まきを心配する▼近くの小学校の通学路沿いに、今年初めてマリーゴールドを植えた。感心したのは半年近く花を咲かせてくれたこと。先日、枯れた花を抜き集め、そのあとに腐葉土を入れ、パンジーとキンセンカの苗を植えた。5月ころまで楽しませてくれるだろう。苗は、道の駅などに出荷している隣の婦人から買うので、ささやかな収入にもなる。「来年からきちんと花の計画しましょう」と言われた▼師走には神社の掃除をし、しめ縄を新しくする。草を刈り、落ち葉を集めながら、新年を迎える準備。今年は落ち葉で腐葉土を作り、通学路に敷くつもり。気がつけば、あっという間に一年が過ぎ去る。加齢に応じて時の流れを速く感じるのは、感動が少なくなるからとの説があるが、むしろ逆で、楽しいことが多いからそうではないか▼飯島太千雄の『若き空海の実像』（大法輪閣）に、密教は仏教の前からの宗教で、それが仏教の形を借りて再び現れた、とある。人間の霊性とはそういうもので、日本では自然にはぐくまれた神道がそれ。コロナ禍は、そんな人と自然とのかかわりを再考させてくれた。死は進化の結果という生物学的死生観も、その先にある。

社説

日本人の心性に合う宗教とは

遠藤周作の没後25年に当たる今年、遠藤の信仰を問い直すテレビ番組や出版があった。遠藤が、母から与えられたカトリックを「お仕着せの洋服」に例え、それを自分なりに「仕立て直す」のを生涯の仕事にしたことはよく知られている。

最後の長編小説『深い河』の主人公のモデルは、遠藤と同じ船でフランスに留学し、カルメル会修道院に入った井上洋治司祭で、フランス人の価値観やスコラ哲学のフランス神学に違和感を共有した二人は、互いに「戦友」と呼び、生涯のテーマを確認している。

仕立て直し

NHKETVの「こころの時代」の「遠藤周作没後25年 遺作『深い河』をたどる」に出演した批評家の若松英輔と山根道公ノートルダム清心女子大学教授はともに井上神父が主宰する「風の家」で学び、神父を「心の師」とする親友。「風」は古代ギリシャ語「プネウマ」の訳で、「空気、大いなるものの息、聖なる呼吸」などを意味し、英語のスピリットの語源である。

井上が司祭になろうと思ったのは、リジューの聖テレーズの自伝を読み、感動して、その世界を生きてみたいと思ったから。神は小さきもの、悪をも包み、すべてを愛するという信仰で、それは日本人の心情に通じると感じたのである。

それに対してフランスの神学には明確な階層的序列があり、善悪を峻別していた。神学生の仲間に「おまえの神はどういうものか」と聞かれ、井上は「あなたたちが考えているように外にあるのではなく、私の中にもあり、すべてを包むもの」と答え、異端視されたという。

社会学者の見田宗助（むねすけ）東京大学名誉教授は、キリスト教の原罪主義に対して日本人は原恩主義だと唱えた。時にひどい災害ももたらすが、それも含めて自然に対する感謝が日本人の心性を形成してきた。それは、東日本大震災で被災した人たちの振舞い、心情を見ても、今に続いていることがわかる。

ルターに匹敵する日本仏教の改革者とされる法然が弟子の親鸞により広まる悪人正機説を唱えたのも、渡来宗教である仏教を日本の風土に根付かせる大きな営みであった。遠藤や井上が深く学んだのも仏教で、とりわけ法然に共感していたという。彼ら日本仏教の宗祖たちと同じような努力を、文学と神学の中でしたいと考えたのであろう。

その営みは、英語を駆使して多くの著作を残しながら、洋風化の明治に頑として和装を通した岡倉天心にも通じている。天心がインドで出会い、深く交わったヒンドゥーの出家者ヴィヴェーカナンダは、円覚寺の釈宗演も参加した1893年にシカゴで開かれた世界宗教者会議でわずか3分半の講演をし、「世にあるさまざまな宗教という『河』は一つの『海』に流れ込むように存在している、宗教は互いを否定し合うために存在しているのではなく、分かり合い、深め合うために存在している」と語り、大きな感動を呼んだ。その後の宗教間対話の端緒となる出来事であった。

宗教が「もとの教え」であるのは、人々の心の奥底にある思いを喚起し、その人なりの姿勢、信仰に育てるからではないか。大事なのは、その人の成長であり、世俗としての教団の維持・発展ではない。

原点回帰と成長

コロナ禍は私たちにとって本当に大切なものは何か、問い直す時間を与えてくれた。単なる形式や付き合いをそぎ落とし、自分を成長させてくれるもの、ことを求める生き方が、コロナ後の課題ではないか。そうしてこそ時代的な閉塞を打ち破ることができる。

科学技術の進歩はAIにより人類初のサイボーグを生むまでになった。ハラリの『ホモ・デウス』に似て、脳の情報を機械に保存し、臓器も機械に置き換え、永遠の生命を獲得し、まさに神（デウス）になろうとする。それを人類の「進化」とする時代に、宗教は応えないといけない。

宗教の歴史は仏教の戒律運動にもみられるよう、原点回帰、信仰復興の歴史でもあった。日本人の原点に返ることで、日本人の心性に合う宗教を求める姿勢が、今求められている。

本紙定期購読のお申し込みは

■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。

宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料　年間6000円（税、郵送料を含む）

山喜房佛書林
補陀洛信仰の研究
神野富一著　A五判　五八〇頁　本体一六、〇〇〇円
チベット・アジア各地の補陀洛信仰とその伝播ルート等の集大成
弘法大師聖句集成
福田亮成編　B六判　二九〇頁　本体五、八〇〇円
本書は大師の言葉が読者の心に直接届くよう工夫され、掲示伝道や寺報の種子に最適。
〒113-0033 東京都文京区本郷5-28-5
TEL：03-3811-5361 FAX：03-3815-5554

たま出版
www.tamabook.com
魔のJR中央線
―自殺霊の撮影で判明したこと―
齋藤 齋靈 著
四六判158頁
定価1，365円（税込）
十年の歳月をかけ、ついに自殺者の霊の撮影に成功。
霊能者が書いた自殺防止の書。死んでも痛みは残るもの、自殺者の言い分〝こんな筈では〟自殺をした状態で霊はさまよう、硫化水素自殺、政治家と自殺、自殺の多いJR中央線の謎を解く！
アシレス出版部発行
お近くの書店にない場合は下記へ 送料210円
〒229-0002 相模原市渕野辺本町2-17-14
TEL042（751）2558　FAX042（754）1818

人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土思想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
新刊！
私の生命（いのち）の復活
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
四六判296頁（本体1500円＋税）
上橋 泉 著
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15
ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が足で調べた大和建国の謎。
日本国始め 饒速日大神の東遷
（定価：本体2000円＋税）
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纏向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36
鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

日本よ、蘇れ
日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製　232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社　販売企画部
〒105-8070　東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み　FAX:03-3578-3075

日本宗教の闇
室生 忠 著
四六判・520頁　定価：本体2，000円＋税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL078（882）9305　FAX078（801）0006

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162-0821 東京都新宿区津久戸町 3-11
電話：03-6265-0852　FAX：03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp